

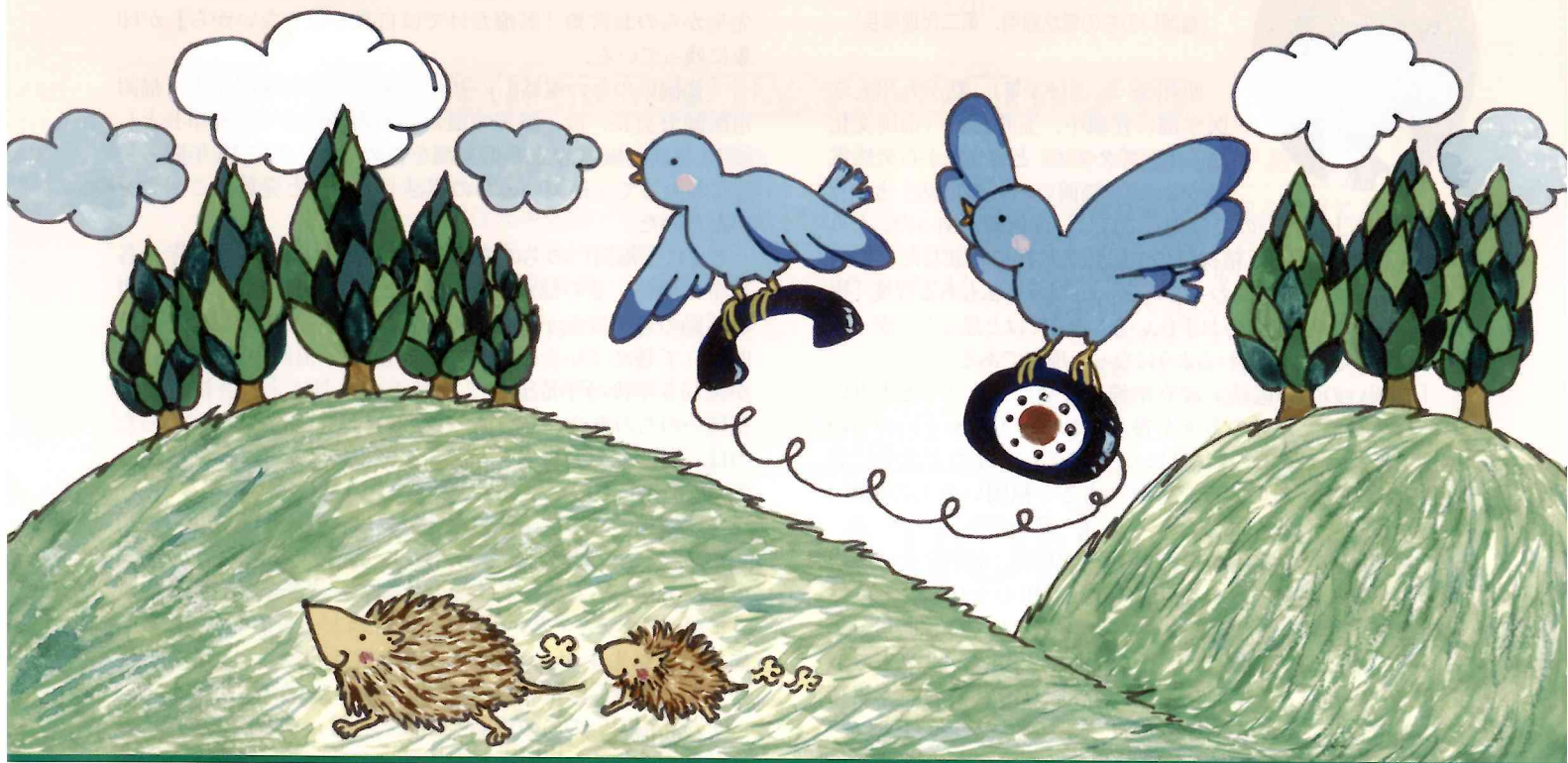


福岡いのちの電話

2019. 10. 1

139号

相談電話(092)741-4343 24時間年中無休



「開局35周年を 迎えるにあたって」

社会福祉法人福岡いのちの電話

林 幹 男

(理事長)



今年の10月をもって福岡いのちの電話は開局35周年を迎えます。1984年の開局時は、72名のボランティアによる1日4時間（日曜日を除く）の相談体制で出発しました。その後、ボランティアの数が増え、現在では180名余のボランティアで24時間年中無休の相談体制へと活動を拡大してきました。この間、相談員として関わっていただいたボランティアの方々をはじめ、活動を物心両面で支えていただいている後援会役員・団体、千人会をはじめとする市民、行政関係者、法人役員の皆さまに、あらためて感謝申し上げる次第です。

現在、厚生労働省の助成を受けた日本いのちの電話連盟事業としての、フリーダイヤル「自殺予防いのちの電話」事業に参加しており、電話相談に加え、インターネットによるメール相談など新たなコミッション・システムに応じた相談体制を敷いております。また、被災された地域に限定した電話相談事業「震災ダイヤル」にも協力してまいりました。

しかしながら、これらの活動を継続することは容易なことではありません。昨今、漸減傾向にある相談ボランティアの増員や財政面の安定化、つながりやすい電話とするための運用面の改善等々、乗り越えなければならない課題も山積しております。

開局35周年を機に、あらためて初心に帰り「眠らぬダイヤル」として、いのちの電話にさまざまなかたちで寄せられる利用者の「こころの叫び」に対し、真摯に対応することに日々努力してまいりたいと思います。

団体、行政、個人を問わず、地域の皆さまから関心を持ってご支援をいただいてこそ、「福岡いのちの電話」があります。今までの皆さまからのご厚志に深甚の謝意を表しますとともに、今後とも変わらぬご理解、ご支援をたまわりますよう、心よりお願い申し上げます。

「福岡いのちの電話」 開局35周年に寄せて

—開局の頃の思い出を中心に



九州大学心療内科第二代教授、医師

中川 哲也

(福岡いのちの電話顧問、第二代理事長)

昭和58年(1983年)、私が九州大学医学部に在職中、玉井正雄(福岡文化ライオンズクラブ)という方から突然電話があり、「福岡いのちの電話」という組織を立ち上げたいので協力してほしい旨依頼があった。どうすべきか迷った私は、精神科の中尾弘之教授に相談したところ、「私はここらの電話に関わっている」と言われ、私もある程度「福岡いのちの電話」設立のお手伝いをしなくてはと思ったのが、「福岡いのちの電話」に関わるようになった理由である。

「福岡いのちの電話」設立準備委員会には、文字どおりいろいろな職種、分野の方々が参加され、そもそも「いのちの電話」とは何か、その組織はいかにあるべきかなど活発に討議が行われた。このような背景のもと「福岡いのちの電話」設立が正式に承認された。

「福岡いのちの電話」組織の中で、実際に電話を受けて依頼者からの相談を担当するのは、養成講座や全体研修を受けるなど、一定の訓練を受けたボランティアとしての相談員である。その第一期生募集には、定員60名に対して92名もの応募があり、その方々に面接したとき、それぞれの熱い志望動機に感激したことが思い出される。そして昭和59年(1984年)10月22日に、福岡市中央区舞鶴の「福岡いのちの電話」事務局で、第一期生72名による電話相談がスタートした。最初は、2台の電話で、18:00～22:00(日曜日を除く)であったが、翌年9月には10:00～22:00(年中無休)に延長された。

もともと「いのちの電話」は、複雑な現代社会の中で孤立化し、自殺をはじめとする精神的な危機に陥って助けを求めている人々に対して、電話という身近な媒介手段で、依頼者との対話を通して、精神的に支え、ともに問題解決を図っていくとする援助活動を指している。その精神運動の源流は「よき隣人でありたい」という願いのもと、電話による手段で、自殺防止など心理的な援助活動を目指した、英国のザ・サマリタンズ(1953年)にあるとされている。

わが国で「日本いのちの電話連盟」が発足したのは昭和46年(1971年)で、その基本的な立場として、援助を求める人の匿名性と相談内容の秘密の確保、政治的、思想的な自由の

尊重、24時間、年中無休の体制を原則とし、民間の手によるボランティア組織として運営されていること、一定の訓練を受け認定されたボランティアである相談員によって電話相談が担当されることなどが申し合わされている。

私たちの「福岡いのちの電話」も「日本いのちの電話連盟」に所属し、九州では沖縄県、北九州市に次いで、3番目の開局になったが、「福岡いのちの電話」の先輩格である「北九州いのちの電話」の理事長をされていた、秋山聡平先生(精神科医)に、「先生はどうしていのちの電話に関わりをもつようになったのですか?」とお伺いしたことがある。それに対する先生からのお言葉「医療だけでは自殺を救えないから」が印象に残っている。

「福岡いのちの電話」の初代理事長、阿部輝明先生(福岡市医師会会長)は、誠実で温かいお人柄の方で、理事長として13年間、組織設立準備期間を含めると、実に15年間の長きにわたって「福岡いのちの電話」の育成と発展にご尽力をいただいた。

とくに「福岡いのちの電話」開設初期の頃で、官公庁や各種事業団体、その他からの寄附などが十分に確保できず、組織活動の運営資金が不足がちな折に、先生個人の資産を一時的に立て替えていただいたこともある。「福岡いのちの電話」が開局5年後の平成元年(1989年)11月に「社会福祉法人福岡いのちの電話」となり、社会的に認知されるようになったのは、阿部輝明先生のご指導、ご努力によるところが大きく、深く感謝申し上げたい。

「福岡いのちの電話」の事務局長は、安藤延男先生(九州大学教授、後に福岡県立大学学長)で、持ち前の幅広い視野、豊かな人脈をもとに、事務局の体制の基礎を築かれた。当時はまだボランティアという言葉が現在ほど一般的でなく、事務局長の安藤先生が、ボランティアの電話相談員に対して、手弁当で交通費も自弁でと説明されていたことが思い出される。

また「福岡いのちの電話」開設当初は、社会的にまだその知名度が少なく、寄附などの活動資金をいかに確保するかが大きな課題であり、その一助として千人会が設立された。

安藤事務局長から、電話相談員に関する教育委員会の委員長を引き受けて欲しいと相談され、自分は適任でないと辞退したが、安藤先生に説得され、教育委員長を引き受けることになった。

その課題として、心理専門職とは異なる、ボランティア電話相談員の位置づけ、電話相談員としての基本的な姿勢、匿名での電話相談に付随する諸問題、養成講座や継続研修の在り方などが、いろいろ討議された。前述のように、ボランティア電話相談員の資質向上のために、継続的な研修が義務化されている。その点で、各曜日班のスーパーバイザーとして、心理専門職の先生方による熱心で、懇切な、長年にわたるご協力に改めて感謝申し上げたい。

福岡いのちの電

■ 1983年(昭和58年)

6月 「福岡いのちの電話設立委員」発足

■ 1984年(昭和59年)

10月 電話機2台で「福岡いのちの電話」開局

■ 1988年(昭和63年)

7月 第1回福岡いのちの電話会員総会開催

12月 24時間年中無休体制へ移行

■ 1989年(平成元年)

11月 社会福祉法人として認可を受ける

■ 1991年(平成3年)

2月 聴覚障害対象のファクシミリ相談を開始

■ 1994年(平成6年)

7月 「福岡いのちの電話後援会」が発足

9月 相談員養成サポーター制度を開始



いのちの電話 35周年にあたり思うこと



後藤クリニック顧問、精神科医
後藤 哲也
(福岡いのちの電話評議員)

いのちの電話 35 周年おめでとう
ございます。さまざまな困難を乗り
越え、かつ今後も相談技術が電

話からインターネット、さらにはチャットと急激に変化する
中、その対応には一層の困難も予想されます。

私がいちのちの電話に関わったのは千人会員になったこと
が始まりです。仲間内に千人会員を募り、そのうち鶴城ラ
イオンズクラブの故市村勲氏の後任として理事を拝命し、
現在は評議員を致しております。

他方、私は精神科医であり、同じ精神科医で作家の森山
成楸(筆名 帚木蓬生)先生が掲げられる negative capability
(どうにもならない状況を逃げず、踏みとどまり、丸ごと
支える能力)の涵養を目標に、現在は 80 歳に至っています。
そして negative capability の一番の心構え、手段が傾聴で
す。傾聴が成功ならば相手の機嫌が良くなり、自ずと親切
丁寧になり、寛容の心が出現します。この寛容の心が敵方
をも許す程になれば、傾聴者の本懐でありましょう。

世の中に AI がいかに進歩したとしても、ボランティア
の方々の利他の志と行動こそが人間に残される最後の徳目
であり、皆さんの示される生き方の一つ一つが後世への贈
り物になると信じています。

ボランティアの皆さんとその方々を支える事務局を始め、
関わりのある皆さんのご活躍を祈り、35 周年への感想と
させていただきます。



さまざまな出会い



福岡大学ヒューマンデベロップメントセンター
非常勤カウンセラー、公認心理師
松尾 公孝
(福岡いのちの電話教育委員長、養成講座講師)

いのちの電話では、相談員の経
験だけではなく、さまざまな役割
を経験させてもらいました。ほぼ

研修担当でありましたが、特に心に残るのは養成サポーター
を通じた出会いだったように思います。30 代で子どもも
まだ小さく、大人としての人生をようやく踏み出し始めた
頃に、人生経験豊富な先輩方に交じって研修を受けると
ころから始まりました。2 年目からは研修として野島一彦先
生のグループ体験が始まりました。何を話してもいいとい
うことでしたが、何を話していいか戸惑っていると、先輩
たちが自分の人生を語り始めました。日頃穏やかな方が、
想像もできないような波乱に満ちた、ドラマを見ているか
のような人生経験を話されます。戦争体験までも出てきて、
映画やテレビでしか知らなかった世界が、本当にあったん
だ、幾多の苦難を乗り越えられてきたのだと実感しました。
自分の狭い薄っぺらな経験とはまるで違いました。人生に
は幅と奥行きがあるものだと思わせられました。通話者
の人生もそれぞれに幅と奥行きがあり、その一部を聴かせ
てもらっているのだなと思いました。電話線でつながって
いるものの、それを想像力で膨らませ、幅と深さをもって
理解するようになればと思ったものでした。

そのような経験を積み重ねながら、サポーターとして、養
成講座を受講されている方たちと演習でロールプレイをし
たり、初めて電話を取られる時のサポートをしたりしました。
初めのうちは、受講生の方が年齢が高く、どのように伝えら
れよいか悩むこともありましたが、日頃の電話経験でも
通話者の方が年齢は上でしたので、通話者と同じように、年
齢と経験を尊重しつつ率直に伝えるようにしました。受講生
の方たちもゆとりがあり鷹揚に受け止めてくださいました。

事務局の方やスーパーバイザーの先生方などさまざまな
方との出会いがあり、大人としての自分が形作られ、成長
を重ねられたのだと思います。感謝に堪えません。

話の主な出来事

11月 事業ボランティア制度を開始
開局10周年の集いを開催(記念誌を発行)

■ 1995年(平成7年)

3月 電話機を3台に増設

■ 2001年(平成13年)

12月 厚労省補助事業フリーダイヤル方式「自殺予防いの
ちの電話」を開始

■ 2002年(平成14年)

12月 相談活動運営委員会が発足

■ 2004年(平成16年)

11月 開局20周年記念式典を開催(記念誌発行)

■ 2005年(平成17年)

9月 自殺防止公開講座「自殺!? ちょっと待ってー思いとどま
ってもらうために」を朝日新聞厚生文化事業団と共催開始

「いのちの電話の究極の目標」



南蔵院住職

林 覚 乗

(福岡いのちの電話後援会副会長)

ある人が喋る体重計の話をしてくれた。体重計に乗ると「この頃少し体重が増えていますよ」とか「食事に気をつけましょう」などと言うそうだ。あるご婦人が乗ったところ、「一人ず

つ乗ってください」と言われたとか。この体重計の行く末がどうなったかは別にして、こうまで科学が発達してくると、私たちはその便利さゆえに、かえって機械に支配されるような状態になっているように思う。

街を歩いても、電車に乗っても、バスを待つ間もずっとスマホをいじっている人々のなんと多いことか。それでいて幸せそうな顔をしているとは到底思えない。機械に使われているかわいそうな人間に見えてしまう。メールを送れば友達に無視されることに怯え、常に誰かと連絡を取り合わねば自分の存在を確認できない。何と情けないことだろう。

アップル創立者のスティーブ・ジョブスは自らがiPadを創りながら、そして世界中で販売したにもかかわらず、自分の子供たちには決してiPadを使わせなかったという。アメリカのIT関係経営者たちの多くがジョブスと同じような行動をとっている。それはなぜなのか。それはこの便利な機械が、それに依存する人間を作り出すことを知っていたからだと言われている。

巷に溢れているスマホに夢中の人々は、自分がいつの間にかこの便利な機械の中毒にかかっていることにさえ気付かない。情報の海の中に漂い、自分の頭で考えなくても生きていける現代。しかし、だからこそ、自分の人生を自分自身で真剣に考えることが必要になってきていると思う。

中学時代の友人の父親で、BC級戦犯として死刑宣告を受け巣鴨プリズンに入所していた方がおられた(後に減刑されて出所)。死と隣り合わせの生活は過酷であっただろう。その極限状態の中で、その方の心に響いたのは「現在を最善に生きよ」という教誨師の言葉であった。明日は死刑かもしれないという毎日の中で、家族に日記を残し、歌を作り、凶書の修理に尽くした日々を、本当に充実していたと述懐されている。

我々は現在、自由で便利な世界に生きていながら、どれだけの充実感を持って生きているだろうか。

これから「いのちの電話」の将来がどう変わっていくのか私には分からないが、目標はある。幸せな人々が増え、一本の相談電話もかかってこない、そんな日が来ることを願ってやまない。

いのちの詩



福岡北ライオンズクラブ第15年度、第32年度会長

光 澤 智 吉

(元福岡いのちの電話後援会理事)

昨年の総会終了後、1,000円の会費を出して慰労会に参加させていただきました。楽しい歓談のあと配布された「たなばた」、「歌の街」など、童謡やポピュラーな歌、詩

のコピーを見ながら楽しい合唱で更に気分を高揚させ明るいひとときを過ごしました。コピー最後の詩が「いのちの詩」でした。ボランティアの方の作品だそうです。転載させていただきます。

いのちの詩

- 1 もう頑張れない
いろいろあって 電話を聴くことも 当番を続けることも
崩れそうな 私の苦しみ だれにも 言えない
ただどね 待ってる仲間 いのちの叫び
- 2 闇から 繋がった
切られて 切ない 受けて重たい あなたの悩み
耳を傾け 寄り添ううちに 一人きりじゃない
そうだよ 共に感じた いのちの絆
- 3 もう一度
見えた過去 見えない未来 でも生きなきゃ
力を抜いた あるがままの自分 それでいい
きつとね 明日につなごう いのちの希望

ああ いのちの輪 いつまでも
ああ いのちの和 いつまでも いつまでも
ああ いのちの輪 いつまでも
ああ いのちの和 いつまでも いつまでも いつまでも

1～3番にある電話相談員の方々の相談の現実、解決しやうのない重い沈黙。こうした苦しみの中、無力な自分を達観したうえでボランティアを継続する強固な意志と仲間意識、そして希望の表現。ボランティアの方を中心とした先の慰労会での合唱や高揚感がこのいのちの詩の境地だと気付きました。

いのちの輪、いのちの和をいつまでもつないでいこうと思いました。

福岡いのちの電

■ 2007年 (平成19年)

2月 福岡市自殺対策協議会が発足(メンバーとして参加)

■ 2010年 (平成22年)

10月 インターネット相談を試行開始

■ 2011年 (平成23年)

3月 第1次震災ダイヤルを開始(13日間)

4月 インターネット相談を本格開始

9月 第2次震災ダイヤルを開始

■ 2013年 (平成25年)

9月 第2次震災ダイヤルの終了

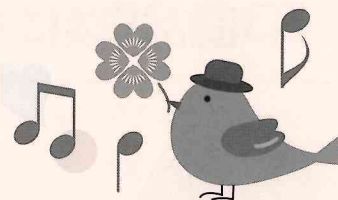
■ 2014年 (平成26年)

3月 ファクシミリ相談の終了

10月 開局30周年記念式典を開催(記念誌を発行)



「いのちを」つなぐ



福岡女学院大学大学院教授、臨床心理士

安部恒久

(福岡いのちの電話 曜日班スーパーバイザー)

私たちの悩みごとは、24時間休みなしです。したがって、24時間いつでも自分の話に耳を傾けてくれる機会を持てることは、とても素晴らしいことだと思います。しかも、出かけて行き、顔を突き合わせて話すのではなく、電話で話せることは、緊張感を強いられやすい人にとっては助かることなのではないでしょうか。電話が繋がることは、いのちが繋がることだと思います。電話で話しているその時間は、いのちが繋がっているのです。電話で話すことは、社会との繋がりを実感でき、また自分自身をも実感できることになるのでしょうか。

しかしながら、顔も名前もわからない人の電話を受ける方は、とても大変なことです。心身ともに、強いストレスを受けることになります。自分一人で、何もかも引き受けてしまわないことです。みんなで分かち合いましょうという意味合いで、スーパービジョンの時間も設けてあるのだと思います。できるだけ、長く継続して活動を続けるためには、疲れたときは一休みしていただき、まわりの仲間と話を聞いてもらうなど、自分自身を充電することが必要でしょう。

スーパービジョンの会に参加させていただき、皆さまの活動に、毎回、本当に敬服しております。皆さまの人生が、いろんな生きざまにふれることによって、さらに豊かになることを願っております。

なぜこのような印象を受けるのでしょうか。もしかすると、これまでにいのちの電話に関わってこられた皆さまが、それだけ一生懸命にエネルギーを注いできたということの現れなのかもしれません。そして皆さまのいろいろな思いが35年の間にいのちの電話という活動に深く刻まれていったのだらうと思います。さらに言えば、私のそうした印象の背景には、有史以前から人が人の生に真摯な想いを寄せてきたこと、そしてその生が失われるかもしれない局面に際して、居ても立ってもいられない、そんな人々の念を感じるからかもしれません。人間の心の中にずっとあったそうした活動が、ごく最近になってようやくいのちの電話という一つの形になり、私たちの活動の場になっているのかもしれないと思います。

福岡いのちの電話に関わって



九州大学院准教授、公認心理師

金子周平

(福岡いのちの電話 曜日班スーパーバイザー)

開局35周年と聞いて少し意外だと思いました。福岡いのちの電話の各種委員会、班活動、各曜日のスーパーバイズ、その他の研修、事務局などの盤石の体制から、40年、50年近くは経っているのだらうと思込んでいたのです。しかしよくよく振り返ってみますと、そうした予想は、頭で考えることによってやや修正された感覚であることに気がきます。私がかもっと心の深いところで感じていたプリミティブな直感は、いのちの電話の活動がさらに歴史が古く、何百年も前から脈々と、そして力強く続いてきた活動であるというものでした。不思議な感覚ですが、それは最初からこの活動に対して抱いていた確かな印象です。

スーパーバイザーとしてお手伝いをさせていただく中で実感するのは、通話者一人ひとりのお話も、それを受ける相談員も、本当にさまざまであるということです。そして、その二人が、電話がつながっている瞬間瞬間に一期一会の出会いを積み重ねていっていることが、毎回のスーパービジョンの中で伝わってきます。

35周年を記念して、改めてこの活動に関わっておられる皆さまへの尊敬と信頼の念、そして福岡いのちの電話に関わらせていただいていることへの感謝を申し上げます。

35周年を記念して、改めてこの活動に関わっておられる皆さまへの尊敬と信頼の念、そして福岡いのちの電話に関わらせていただいていることへの感謝を申し上げます。

35周年を記念して、改めてこの活動に関わっておられる皆さまへの尊敬と信頼の念、そして福岡いのちの電話に関わらせていただいていることへの感謝を申し上げます。

話の主な出来事

2016年(平成28年)

- 5月 熊本地震に対応し「熊本いのちの電話」への電話を転送受信(7日間)
- 7月 フリーダイヤル「熊本いのちの電話」に参加(2018年3月まで)

2018年(平成30年)

- 9月 自殺予防週間の街頭啓発を福岡県と実施

2019年(平成31年)

- 3月 自殺対策強化月間の街頭啓発を福岡県と実施
- 10月 開局35周年を迎える

「電話相談に『対話』を」



川谷医院院長、医師
川谷 大治

(福岡いのちの電話養成講座講師)

電話相談の難しさは、やり直しがきかない、一期一会の心を旨とする1回勝負にあるような気がします。セッションを重ねていく心理療法であれば失敗を次に生かせます。しかし、電話相談は1回

きりの出会いなのでやり直しができません。可能な限り失敗を少なくし、通話者の心に寄り添うにはどうしたらよいのでしょうか。経験を積むしかないのでしょうか。しかし、熟練者も手慣れてくると、自信が慢心になる危険性が潜んでいます。いつの日か大きな失敗につながるかもしれません。

1回きりの相談を可能な限り失敗しないようにするには、ひたすら通話者の話に耳を傾け、自分の考えや思いをオモテに出さないようにすることに尽きるでしょう。この受身的かつ自己消去的なアプローチだと確かに失敗は少なくなるかもしれませんが、でも、通話者にとってはのれんに腕押し、壁に向かって話しているようなものですから、手ごたえを感じられずに受話器を置かれるかもしれません。なぜなら、「死にたい」と言って相談する人の心の片隅には「自殺」を否定したい気持ちもあるからです。だから、彼らの「自殺」を否定する気持ちにもコネクトしなければなりません。

それは、私たちの「自殺」を否定したい気持ちとつながり、必然的に、私たちは自分自身を通話者の前に出すはめに陥ります。というのは、生きるか死ぬかの瀬戸際にいる人の相談を受ける場合、私たちは彼らと同じように自分の人生観、価値観、そして倫理観といった、つまり自身の「哲学」を問われることになるからです。そして、話を伺っているうちに、必ずや「私はこう思うのだが」という考えが生まれるものです。そこで二人の間に衝突が発生し、その衝突を熟練者のように質問へと切り替えて回避できたとしても、衝突はくすぶったままですから、下手をすれば失敗の原因になる危険性が潜んでいるのです。

もともと私たち日本人は他者との間で衝突が起きないようにする「和」の手立てを幼い頃から学び、自分を出さないようにする術を既に習得しています。なので、電話相談に乗るボランティアの人たちにとって衝突が起きないようにするのはお手のものです。しかし、それだけでは、通話者にとって話を聞いてもらったという満足は得られても、葛藤や矛盾に触れて、互いに理解し共感に至るステージにたどり着くのは難しいかもしれません。

自分を出せば衝突が生まれ、自分を引っ込めると通話者には物足りない。この矛盾を抱えながら、通話者に迎合せず、時には対立を避けずに、その相違に真摯に耳を傾け、そして互いに理解し合う「対話」が欠かせない、と私は思うのです。「死にたい」と思っている通話者と、「死んではいけない」と思っている受話器を持って

る私たちの間には必ず対立や葛藤が生じるものなので、それから逃げずに、むしろその対立が二人の相互理解を深める原動力になるという「対話」術を学ぶ必要があるのかもしれませんが。

そんなことを、ボーダーライン患者や引きこもり青年との治療の中で感じ、奮闘努力している日々です。

福岡いのちの電話の開局35周年に寄せて



九州大学准教授、臨床心理士
福盛 英明

(福岡いのちの電話養成講座講師)

私は福岡いのちの電話の養成講座で「人生の危機とつきあう」を担当し、また自主研修会のファシリテーターを担当させていただいております。

養成講座での1コマを私が担当するようになってからおよそ10年、その間に日本は地震や大雨、台風など多くの危機があり、「きずな」「助け合い」などの言葉が共有されました。いのちの電話も危機に瀕した人々の傷ついたところに寄り添い、多くの人々に癒しを与えてきました。

また、自主研修会では、災害などとは違ったそれぞれ個人の人生の危機に直面した人々の、傷つき助けを求めるころの物語を一つ一つ聴かせていただきました。通話者のそれぞれの生い立ちやとりまく状況、出来事はさまざま(多くの場合詳しくはわかりませんが)、経験はより個別的で他人には見えにくいものが多いです。そのような傷ついたところに寄り添うためには、「理解しましたよ」というメッセージや通話者の「今」を肯定する一言が必要なのだということを学びました。

ジェンドリン (Gendlin) は、「人とワークすることの本質は、生きている存在としてそこにいること (to be present) である (1999)」という言葉を残しており、それを「プレゼンス」と呼んでいます。それは傾聴や



福盛英明氏による研修会の様子

共感の土台となる概念で、相談やカウンセリングでは話を聴くことが大事とされています。しかし、こちらのところが定まっていなければ話を深く聴くことはできません。また、やりがいなど強い前向きな力だけではなく、ところに余裕をもつことや自分に起こる感情を丁寧に言葉にしていこうといった、静かに自分に向き合う、そのような力が大事になります。今の時代はこの「プレゼンス」が特に大事になっているのではないのでしょうか。

研修を通して、相談員の皆さんが通話者に誠実に寄り添っていらっしゃる経験を聴かせていただき、また技量の向上に向けた静かな熱意に触れ、いつも心を打たれます。それとともに、相談の土台を支えていらっしゃる組織の皆さんも、運営のさまざまなお仕事と心配りをボランティアでされているのを見て、本当に尊いことだと思います。危機の状態にある通話者が癒されるだけでな

近年の
主なイベントを
ご紹介いたします



チャリティコンサート



福岡県自殺対策強化週間街頭啓発



国際ソロプチミスト大宰府からの寄附金贈呈

く、相談員のみなさんも成長や癒しがもたらされますように、そしていのちの電話の活動に社会の人々が一人でも多く共感し、社会的・経済的な支援が今後益々増えていくことを願っています。

自殺予防を行う支援者になるということ



福岡大学医学部精神医学教室講師、医師

衛藤 暢明

(福岡いのちの電話教育委員、養成講座講師)

ボランティア養成講座講師および教育委員を務めています衛藤暢明と申します。私は、平成18年から、福岡大学病院の救命救急センターに搬送される自殺企図者（自殺を図った人）を対象とした調査・研究で自殺予防活動に関わるようになりました。救急の医療機関には多くの重症自殺未遂者が入院となります。一部は身体的治療の甲斐なく亡くなってしまいう人もいます。このような患者さんやその家族への対応を行い、自殺行動そのものや心理状態について深く知ることによって、自殺の「予防」につながるような知識を得るとともに、対応の工夫やシステムづくりを行うことを目指しています。

死にたいと思う人たちに対して、支援者は何ができるでしょうか。そのとき、支援者に望まれる資質とはどういったものでしょうか。このことは、非常に困難な、そして大きな問いです。

自殺予防は易しいことではなく、時には支援する側の私たちも業務の中で深刻な孤立や危機的状況に陥ることがあります。それを防ぐために、まず支援者の側が孤立しない在り方を身につけ、普段から実践し続けることが必要であると考えています。「孤立しない、孤立させない」在り方は、支援者だけでなく自殺の危険の高い人やその周囲の人が身につけなければならないものでもあります。

また、自殺予防活動を長く続けている人たちの特徴として、先の見えない困難な状況にあっても、希望を見つけるのが上手なことが挙げられると感じています。支援者は希望が微かで、わずかなものに思っても、それを信じて進み続ける人である必要があるのかもしれませんが。

支援者の関わりを通して、患者さんや患者さんを取り巻く人たちが、このような支援者の在り方から学んでいくことが、実際の治療の中で起こってきます。いのちの電話には、このような支援者が集い、次の世代を育てていく役割もあると考えます。



養成講座講師による研修会の様子

思春期の自殺対策を考える

福岡県立大学理事・教授

松浦 賢長

(福岡いのちの電話養成講座講師)



2001年から健やか親子21という国民運動計画が始まりました。今も第2次となって継続されていますが、これは一言でいえば国の母子保健の取り組みです。わたしはこの取り組みが始

まった当初から現在まで、一貫して思春期分野の評価研究に携わらせていただいています。そこで得られたことをここで書かせていただきたいと思います。

母子保健の扱う範囲は幅広く、妊娠から出産、子育て、そして思春期と、多くのライフステージが含まれています。いま、これらのライフステージで最も大きな問題は何か。それは思春期の自殺です。

健やか親子21の第1次は2001年から2014年までの取り組みでしたが、69指標（74項目）のうち、「悪化」した指標はわずか2つです。それは、「10代の自殺率」と「全出生数中の極低出生体重児・低出生体重児の割合」です。どちらもその率・割合が上昇したわけですが、後者（低出生体重児）については割合の上昇が、

医療技術の進歩など、必ずしも悪化とはいえない側面もあります。一方、前者の10代の自殺は“純粋な”悪化といえます。母子保健における最も大きな問題が、思春期（10代）の自殺と考える根拠です。

健やか親子21が第2次に入っても、10代の自殺については芳しくない状況が明らかになっています。それが、低年齢化です。10代前半（学齢期）における自殺率が上昇しているのです。平成29年度は10代前半の死因の第一位

となりました（自殺はそこから30代までの全年齢階級で第一位）。

なぜ10代の自殺に好転の兆しが見えないのか。それは、対策が効果を上げていないからといえます。その前に、そもそも有効な対策が「見えていない」ということがあります。手探りの状況です。

自殺の背景が多様化している中で、対策・対応も多様化が求められています。有効な手立てを探すことも重要ですが、いろいろな取り組みを進めることも重要です。いのちの電話は、その意味でも貴重な存在であり、これからも水際・瀬戸際の対応のみならず、未然防止弁としての社会的機能を果たしていくことになるだろうと大いに期待しています。



インターネット 相談活動



会員総会後の懇談会の様子



福岡市イベントでの手づくり品販売



自殺防止公開講演。久保千春氏

「福岡いのちの電話」活動を維持し、支える方々を紹介します

社会福祉法人福岡いのちの電話 理事・評議員・監事名簿 (2019年6月13日現在)

理事長	林 幹男 (九州情報大学副学長、臨床心理士)
副理事長	濱生 正直 (学校法人九州聖公学園理事長、牧師)
常務理事	五斗美代子 (元福岡市部長、臨床心理士)
理事	五十嵐 実 ((株)福岡住宅センター代表取締役社長)
〃	林 覚竜 (南蔵院副住職)
〃	久保 千春 (九州大学総長、医師)
〃	宮崎 信義 (久山療育園センター長、医師)
〃	楯林 英晴 (福岡県精神保健福祉センター所長、医師)
〃	待井 弘道 (西部ガス・カスタマーサービス(株)代表取締役社長)
〃	長谷川 彰 (西日本新聞社論説委員会副委員長)
〃	徳永 英彦 (相談活動運営委員会委員長)
〃	松原 妙子 (警固法律事務所弁護士)
評議員	川寄 弘詔 (福岡大学医学部教授)
〃	権藤 説子 (税理士)
〃	宗 寿彦 ((株)ふくや網の目コミュニケーション室マネージャー)
〃	高石 彰也 (正円寺元住職、西本願寺ビハラー福岡心の電話顧問)
〃	石井 美栄 (福岡市保健福祉局健康医療部長)
〃	杉田 俊介 (杉田脳神経外科クリニック院長、医師)
〃	宇出 研 (福岡市市民局男女共同参画部長)
〃	藤田 宗春 (ボランティア代表)
〃	宮崎 昌治 (西日本新聞社編集局社会部長)
〃	張 正好 (福岡市社会福祉協議会、地域福祉専門員)
〃	森住 勝子 (福岡市民生委員・児童委員協議会会長)
〃	野田フミコ (福岡県更生保護女性会会長)
〃	堀川 博 (ボランティア代表)
〃	後藤 哲也 (後藤クリニック顧問、医師)
〃	福島あい子 (弁護士)
〃	藤林 武史 (福岡市子ども総合センター所長、医師)
〃	本田 洋子 (福岡市精神保健福祉センター所長、医師)
〃	大堤 智子 (福岡県私学振興・青少年育成局青少年育成課係長)
〃	山田 久雄 ((株)九州エース電研代表取締役)
〃	小山千賀子 (ボランティア代表)
〃	中尾 敦子 (ボランティア代表)
監事	川野 康之 (川野公認会計士事務所、公認会計士)
〃	吉野 正 (吉野・宮下法律事務所、弁護士)
顧問	中川 哲也 (福岡いのちの電話 第二代理事長)
〃	林 覚乗 (〃 元副理事長、僧侶)
事務局長	河邊 正一

福岡いのちの電話 後援会役員名簿 (2019年6月1日現在)

会長	小川 弘毅 (西部ガス(株)相談役)
副会長	遠藤 泰昭 (九州電力(株)上席執行役員)
副会長	林 覚乗 (元福岡いのちの電話副理事長、顧問 南蔵院住職)
理事	鬼塚 活人 (福岡北ライオンズクラブ会長)
〃	出光 芳秀 ((株)新出光顧問)
〃	長柄 均 (福岡市医師会会長・医療法人ながら医院理事長)
〃	川原 武浩 ((株)ふくや代表取締役社長)
〃	西川ともゑ ((株)博多石焼大阪屋代表取締役会長)
〃	柴戸 隆成 ((株)福岡銀行代表取締役頭取)
〃	有村 文章 (福岡平成ロータリークラブ会長)
〃	寺崎 一雄 (テレビ西日本代表取締役会長)
〃	早川 元久 (西日本新聞社監査役)
〃	戸田康一郎 (西日本鉄道(株)取締役執行役員)
〃	永守 良孝 (RKB毎日放送相談役)
〃	立花 英樹 (福岡商工会議所常務理事)
〃	鹿島 康宏 ((株)九電工取締役常務執行役員)
〃	松田 和実 (福岡総合研究所所長)
〃	廣川 昌哉 (九州旅客鉄道(株)常務取締役総務部長)
〃	内富 誠 ((株)西日本シティ銀行総務部長)
〃	山田 久雄 ((株)九州エース電研代表取締役)
〃	稲村 鈴代 (弁護士 稲村法律事務所所長)
〃	和智 凧子 (弁護士)
〃	原田 光 (公認会計士)

教育委員会 委員

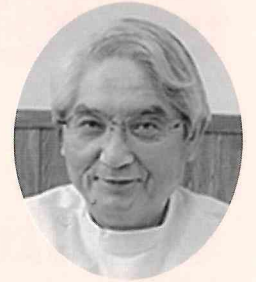
荒浪 聖 (元地域活動支援センター「翼」施設長)
衛藤 暢明 (福岡大学医学部精神医学教室講師、医師)
岡 秀樹 (疋田病院、臨床心理士)
五斗美代子 (元福岡市心身障害福祉センター長、臨床心理士)
楯林 英晴 (福岡県精神保健福祉センター所長、医師)
長谷川 彰 (西日本新聞社論説委員会副委員長)
濱生 正直 (学校法人九州聖公学園理事長、園長)
林 幹男 (九州情報大学副学長、臨床心理士)
松尾 公孝 (福岡大学ヒューマンディベロップメントセンター非常[委員長] 勤カウンセラー、公認心理師、臨床心理士)
松原 妙子 (警固法律事務所、弁護士)
本山 智敬 (福岡大学人文学部准教授、公認心理師、臨床心理士)
河邊 正一 (事務局長)

(各名簿とも敬称略)



リレー 随 想 第17回

福岡いのちの電話理事
宮崎 信義
(久山療育園重症児者医療
療育センター 理事長)



社会福祉法人「福岡いのちの電話」に参加して

当センターの理事として支えてくださった五斗美代子先生（福岡いのちの電話の常務理事）が、2019年5月9日に濱生正直副理事長、川邊正一事務局長とご一緒に訪問され、私を福岡いのちの電話の理事にとのことのお勧めがありました。重症心身障害施設の運営にも力不足であると感じていましたが、初代理事長であった当センターの川野直人（福岡いのちの電話評議員）から、かつて福岡いのちの電話の尊いお働きを伺っていましたので、微力ながら何かお役に立てればと思い、お引き受けいたしました。私は呼吸器内科医から重症心身障害医療へと転身しましたが、臨床心理については疎い者です。しかし、ご奉仕しておられる皆さまも、多忙を極めながら「心の病」や「現代の生き辛さ」に苦しんでおられる方々と共に生き、同伴者として貢献しておられる姿から少しでも学びたいという気持ちもありました。

同年6月13日の理事会、そして7月6日の総会が九州キリスト教会館で開催され出席させていただき、理事就任を受諾させていただきました。会議や懇親会に参加しながら、このように素敵なお働きを淡々と明るく務めておられる皆さまに感銘も受けました。

私が、役員や事務局の方々に学び、そして福岡い

のちの電話から与えられることは何かと考えることがあります。2016年7月26日の相模原市津久井やまゆり園事件の衝撃に抗して、「生きるに価するとは」「生きる意味とは」等の問いに、糸賀一雄先生（近江学園・びわこ学園創始者）が遺された『この子らに世の光を』ではなく、『この子らを世の光に』という言葉以上の答えは思いつきませんでした。そして重症心身障害児（者）はご家族と一体となって前に進んでおられます。最重度の身体障害と知的障害を担いながら、ご家族や周りにいる私たちに何が大切なのかを教えてください。私たちも彼や彼女たちからのか細いサインを見逃さないように聴き続けたいと思っています。たとえ言語的コミュニケーションがとれなくても、喜んだり悲しんだりして存在しておられます。重度重複の障害の原因や治療・療育は多様であっても、確かな存在感を示しておられます。私も老年期に入りできなくなったことが多くなってきましたが、能力障害や疾病・障害を問う前に、私たちが生かされている社会や地域が本当に健全なのかを聴いていきたいと思ひます。よろしくご指導をお願いします。

* - *

福岡いのちの電話スーパーバイザー (認定、更新)

- 安部 恒久 (福岡女学院大学大学院教授、臨床心理士)
- 磯貝希久子 (ソリューションワークス代表、公認心理師、臨床心理士)
- 入江 春代 (元福岡県女性相談所長、臨床心理士)
- 岡 秀樹 (疋田病院、臨床心理士)
- 尾崎 啓子 (埼玉大学教育学部乳幼児教育講座教授、公認心理師、臨床心理士)
- 金子 周平 (九州大学大学院准教授、公認心理師、臨床心理士)
- 才藤千津子 (西南学院大学教授、臨床心理士)
- 瀬里 徳子 (福岡市こども未来局こども総合相談センターこども支援課里親係長、臨床心理士)
- 田中 克江 (東亜大学大学院特任教授、臨床心理士)
- 谷口由布子 (吉塚臨床心理研究所カウンセリングルーム～ひとやすみ～主宰、公認心理師、臨床心理士)
- 本山 智敬 (福岡大学人文学部准教授、公認心理師、臨床心理士)
- 吉川 昌子 (中村学園大学教育学部教授、公認心理師、臨床心理士)

2019年度第45期生 養成講座講師

- 荒浪 聖 (元地域活動支援センター「翼」施設長)
- 衛藤 暢明 (福岡大学医学部精神医学教室講師、医師)
- 岡 秀樹 (疋田病院、臨床心理士)
- 岡田 健一 (九州大谷短期大学准教授、公認心理師、臨床心理士)
- 川谷 大治 (川谷医院院長、医師)
- 久保 千春 (九州大学総長、医師)
- 五斗美代子 (元福岡市中心身障害福祉センター長、臨床心理士)
- 瀬里 徳子 (福岡市こども未来局こども総合相談センターこども支援課里親係長、臨床心理士)
- 楯林 英晴 (福岡県精神保健福祉センター所長、医師)
- 長谷川 彰 (西日本新聞社論説委員会副委員長)
- 林 幹男 (九州情報大学副学長、臨床心理士)
- 福盛 英明 (九州大学准教授、臨床心理士)
- 松浦 賢長 (福岡県立大学理事・教授・保健学博士)
- 松尾 公孝 (福岡大学ヒューマンディベロップメントセンター非常勤カウンセラー、公認心理師、臨床心理士)
- 松崎 佳子 (広島国際大学特任教授、公認心理師、臨床心理士)
- 本山 智敬 (福岡大学人文学部准教授、公認心理師、臨床心理士)
- 吉野 正 (吉野・宮下法律事務所、弁護士)

ご援助 ありがとうございます



寄附感謝報告 2019年6月1日～2019年8月31日 (敬称略・順不同)

上記の期間に次の方々からご支援を賜りました。感謝をもってご報告させていただきます。

*このご寄附には所得税、県・市民税に関して寄附金控除が適用されます。

また、福岡市個人市民税の寄附税額控除が受けられます。

千人会

| | |
|-------------------|--------|
| 藤本 亨 | 10,000 |
| 大西純一(大西医院) | 10,000 |
| 五斗美代子 | 10,000 |
| 中村俊夫 | 10,000 |
| 高倉治雄 | 10,000 |
| 徳永信子 | 10,000 |
| 大島義太郎(尙大島設計) | 10,000 |
| 荒木靖邦(あらきファミリー歯科) | 10,000 |
| 中島昌子 | 10,000 |
| 池邊賢一 | 10,000 |
| 納富育代 | 10,000 |
| 長谷川彰 | 10,000 |
| 小林恒喜 | 10,000 |
| 田中公也(空港前田中医院) | 10,000 |
| 本山智敬 | 10,000 |
| 安武清勝 | 10,000 |
| 野田フミコ | 10,000 |
| 上田章雄(上田整形外科・外科医院) | 10,000 |
| 小深田信昭 | 10,000 |
| 田中みさこ | 10,000 |
| 藤見和代(藤見内科医院) | 10,000 |

| | |
|------|--------|
| 松崎佳子 | 10,000 |
| 穴井元昭 | 10,000 |
| 吉開泰信 | 20,000 |

賛助会

| | |
|------|-------|
| 山田嵯也 | 2,000 |
|------|-------|

法人会

| | |
|---------------|---------|
| (株)サイブモータース | 30,000 |
| (株)ふくや | 50,000 |
| 九州八重洲(株) | 30,000 |
| 西部ガス(株) | 200,000 |
| (株)九電工 | 99,460 |
| 一般社団法人 福岡市医師会 | 30,000 |
| (株)電気ビル | 30,000 |
| 九電産業(株) | 30,000 |
| (株)マルタイ | 30,000 |
| リンナイ(株)九州支社 | 30,000 |
| 九州朝日放送(株) | 60,000 |
| (株)新出光 | 100,000 |
| 九州旅客鉄道(株) | 100,000 |
| 西日本鉄道(株) | 100,000 |

一般寄附

| | |
|--------------------|---------|
| 九州電力(株) | 200,000 |
| 石内みよし | 10,000 |
| 村上 剛 | 20,000 |
| 小山田浩定(総合メディカル(株)) | 100,000 |
| 錦織靖子 | 3,000 |
| 牛島範夫 | 20,000 |
| Smile Fitness Club | 1,185 |
| 龍 忠史 | 10,000 |
| 光澤智吉 | 30,000 |

共同募金

| | |
|--------------|---------|
| (社福)福岡県共同募金会 | 700,000 |
|--------------|---------|

補助金

| | |
|-----|-----------|
| 福岡市 | 5,000,000 |
|-----|-----------|

物品

| | |
|--------------------------------|--|
| 児玉俊一(株)ロイヤル・インテリア)
事務局用カーテン | |
|--------------------------------|--|



コカ・コーラ支援自販機

| | |
|-----------------|---------|
| ㈱紙谷 朝日新聞鳥栖販売店 | 14,628 |
| (財)恵愛団(九州大学病院内) | 110,199 |
| 西部ガス㈱(パピヨン24内) | 146,897 |
| ㈲ダイキ通信工業(自社内) | 17,706 |

| | |
|---------------------------|--------|
| 南蔵院(JR城戸南蔵院駅) | 52,596 |
| ㈱西日本新聞社(本社) | 39,718 |
| ㈱西日本新聞社(製作センター) | 18,361 |
| ㈱福岡住宅センター
(鳥飼1丁目パーキング) | 4,620 |
| 福岡県弁護士会(福岡県弁護士会館内) | 7,478 |

募金

| | |
|--------------|--------|
| 8/6 納涼寄席 募金箱 | 29,248 |
|--------------|--------|

ご寄附は下記の振込先までお願いします

銀行口座：口座名義＝社会福祉法人 福岡いのちの電話
 福岡銀行赤坂門支店 (普) 1147617
 西日本シティ銀行天神支店 (普) 2131458
 郵便口座：福岡いのちの電話千人会(千人会) 01710-1-36652
 福岡いのちの電話(賛助会員・一般寄附) 01720-9-1037

千人会 1口1万円/年(何口でも)
 賛助会 1口2千円/年(〃)
 法人会 1口3万円/年(〃)

ご面倒をおかけいたしますが、よろしくお願い申し上げます。

税制の優遇措置があります

社会福祉法人の認可を受けておりますので、寄附をされた場合、法人の場合は損金扱いに、個人の場合は年間所得の25%まで寄附控除が受けられるといった、税制上の優遇措置の対象となります。また、福岡市個人市民税の寄附税額控除が受けられます。

INFORMATION
インフォメーション

日誌 2019.6.1~2019.8.31

6月

- 7 相談活動運営委員会
- 10 フリーダイヤル「自殺予防いのちの電話」
- 11 事業ボランティア手づくり会
- 12 社会資源班会
第44期生養成講座(演習④)
第3回教育委員会
- 13 評議員会
第3回理事会
- 19 受信資料検討班会
- 22 インターネット相談養成研修OJT
事業ボランティア企画づくり会
研修運営班会
自主研修「ケースと私」
- 25 事業ボランティア手づくり会
- 26 第44期生養成講座
(講師：松浦 賢長氏)

7月

- 1 会報138号発行

- 4 会報139号企画会議

- 6 第32回会員総会
(今村和彦氏講演、親睦会)
- 10 フリーダイヤル「自殺予防いのちの電話」
福岡市監査
第4回教育委員会
- 11 相談活動運営委員会
- 13 インターネット相談活動班会
自主研修「ケースと私」
- 16 第4回理事会
- 17 社会資源班会
第44期生養成講座(演習⑤)
- 17 受信資料検討班会
毎日新聞取材
- 20 研修運営班会
- 23 法人・後援会合同役員会
事業ボランティア手づくり会
- 24 広報活動班会
- 27~28 第44期養成講座(宿泊研修)
- 29 広報活動班会
- 30 事務局会議

8月

- 6 チャリティイベント「納涼寄席」
- 7 第44期養成講座
(講師：五斗美代子氏)
- 10 フリーダイヤル「自殺予防いのちの電話」
- 10~11 電話ボランティア養成サポーター「新規・継続」研修
- 21 第44期養成講座
(講師：松尾公孝氏)
- 27 事業ボランティア手づくり会
- 28 第5回教育委員会
(電話ボランティア養成サポーター交流会)
- 29 第5回理事会
- 31 第2回全体研修(分科会)
(講師：吉川昌子氏、福盛英明氏、鉅鹿健吉氏)
- 第43期生閉講式



第43期生が 閉講式を迎えました

約2年間の研修、ご苦労さまでした。いろいろなボランティア活動がありますが、養成講座の費用を払い、長い研修を受け、実際のボランティア活動では手弁当という、いのちの電話ほど厳しいボランティアはないと思っています。

しかし、いのちの電話ほど有意義な活動もないと思います。わたしは30数年来いのちの電話に携わっていますが、いのちの電話で学んだことはお金には代えられない素晴らしいものです。

「誰かのために、困っている人を助けるために、求めている人に手を差し伸べなければ」という思いでいのちの電話に関わろうとするとその思いは達成されません。なぜなら、私たちは、争いごとを解決したり、病に苦しんでいる人に薬を提供したり、困窮している人にお金を工面したりはできないからです。電話をかけてきた人の悩みや苦しみをただ聴くしかなく、その方に寄り添い、訴えの声を聴くしかないのです。

ある精神科の病院で、大声を上げて興奮する患者に医師たちがなす術なく見守る中、掃除のボランティアをする老婦人の「コーヒープレイクしないか、よければ気持ちを聴かせて」の一言が、その患者を落ち着かせました。これは、世界のいのちの電話の創設者、チャド・バラ氏が

8月31日(土)18:30から、電話ボランティア養成を終えた第43期生の閉講式が行われ、2年間の養成期間を経て認定を受けた12名が濱生直正副理事長から電話ボランティアの委嘱状を受け取りました。式には、五斗常務理事、松尾教育委員長並びに電話ボランティア養成サポーターが参列し、濱生副理事長から労いとお祝いの言葉が贈られました。その要旨をご紹介します。



写真は閉講式の模様です。▲▶

日本で紹介したエピソードです。専門家のやることは専門家に任せる。素人のボランティアは、寄り添い、共感しながら傾聴することで十分なのです。

「やさしく聴き続けてくれる人がいた」という体験は、自分のいのちを断ち切ろうとする人にとって、「死ぬ前にもう一度、あの人に今の気持ちを聴いてもらおう」という思いにさせ、自殺を思い止まらせる、その可能性を信じて電話を取り続けることが、「自殺防止」といういのちの電話の本来の目的です、皆さまのお働きが良きものとなりますことを願っています。



【編 集 後 記】

福岡いのちの電話開局35周年、まさに平成とともに歩んだ電話でした。それは一面、地震、大津波、噴火、異常気象と、災害を通して自然との対峙を余儀なくされた、不安多き時代だったようにも思います。その中で福岡いのちの電話は歴史を刻んできました。抗えない巨大な力を前にしながらも、あるがままを受け入れ、委ねる智慧を学んだ時代だったように感じています。

今回特集号として、福岡いのちの電話を支えてくださっている方々からのコメントをいただいて誌面を組んでみました。改めて、この電話が多くの善意で成り立っているということを実感しています。日々研鑽を積み、少しでもよりよい対応ができればとは思うものの、理想像からは程遠く道半ばが正直なところ。しかし、そのような私たちを支え、後押しする力強い支援者がたくさんおられることを、今回の特集を通して再認識させていただきました。

新たに始まった令和時代。多くの方々に支えられながら、これからも時代にふさわしい在り方を模索していきたいと考えています。
(K. S)

電話受付件数

2019年6月～2019年8月

| | |
|--------|-----------|
| 受付件数 | 3,243件 |
| 延べ相談員数 | 976人 |
| 延べ受信時間 | 1,797.56分 |

発行所

〒810-0073 福岡市中央区舞鶴2-7-7
社会福祉法人 福岡いのちの電話

TEL (092)713-4343・FAX (092)721-4343

ホームページアドレス

<http://www.f-inochi.org/>

発行人 林 幹男
編集人 古賀 俊次



この「会報」は共同募金の配分金で作成しています。